

岡山芸術交流2019

Okayama Art Summit

IF THE SNAKE もし蛇が

9月27日(金) – 11月24日(日)

27 September to 24 November



Press Release
26 September, 2019

岡山芸術交流2019 Okayama Art Summit IF THE SNAKE もし蛇が



2019年9月27日(金)—11月24日(日)

「岡山芸術交流」は、岡山市で3年ごとに開催される国際現代美術展です。
「岡山芸術交流2019」には、アーティストックディレクターとしてピエール・ユイグをむかえ、
2019年9月27日から11月24日の2ヶ月間、
岡山城・岡山後楽園周辺エリアの様々な歴史文化施設を会場に開催します。
展示作品を見るだけでなくアーティストの思考に遭遇し、時間や歴史、国境などを行き来するような芸術との交流を、ここ岡山でお愉しみください。

参加作家数:9カ国18組

アーティストックディレクター／アーティスト
ピエール・ユイグ Pierre Huyghe

アーティスト

タレク・アトウィ
Tarek Atoui

エリザベス・エナフ
Elizabeth Hénaff

マシュー・バーニー
Matthew Barney

エヴァ・ロエスト
Eva L'Hoest

エティエンヌ・シャンボー
Etienne Chambaud

フェルナンド・オルテガ
Fernando Ortega

ポール・チャン
Paul Chan

シーン・ラスペット
Sean Raspet

イアン・チェン
Ian Cheng

リリー・レイノー＝ドゥヴァール
Lili Reynaud-Dewar

メリッサ・ダビン & アーロン・ダヴィッドソン
Melissa Dubbin & Aaron S. Davidson

パメラ・ローゼンクランツ
Pamela Rosenkranz

ジョン・ジェラード
John Gerrard

ティノ・セーガル
Tino Sehgal

ファビアン・ジロー&ラファエル・シボニー
Fabien Giraud & Raphaël Siboni

ミカ・タジマ
Mika Tajima

グラスビード
Glass Bead

開催概要 1



■名称

岡山芸術交流2019

(英)Okayama Art Summit 2019

■タイトル

IF THE SNAKE もし蛇が

■会期

2019年9月27日(金)～11月24日(日)[51日間]

■休館日

月曜日(10月14日(月・祝)、11月4日(月・振休)は、翌日の火曜日休館)

■開催時間

9:00～17:00(入館は16:30まで)

■展示会場

旧内山下小学校

旧福岡醤油建物

岡山県天神山文化プラザ

岡山市立オリエント美術館

岡山城

シネマ・クレール丸の内

林原美術館

岡山市内各所

■運営組織

主催:岡山芸術交流実行委員会(岡山市・公益財団法人 石川文化振興財団・岡山県)

会長:大森雅夫(岡山市長)

副会長:佐藤兼郎(岡山県副知事) 松田 久(岡山商工会議所会頭)

監事:宮長雅人(株式会社中国銀行取締役会長)

総合プロデューサー:石川康晴(公益財団法人 石川文化振興財団理事長)

総合ディレクター:那須太郎(TARO NASU 代表/ギャラリスト)

アーティストックディレクター:ピエール・ユイグ(アーティスト)

パブリックプログラムディレクター:木ノ下智恵子(大阪大学共創機構社会学共創本部(兼21世紀懐徳堂)准教授)

顧問:浦上雅彦(岡山市議会議長) 越宗孝昌(株式会社山陽新聞社取締役会長)

榎野博史(国立大学法人岡山大学学長)

■構成団体

岡山市、岡山市教育委員会、岡山県、岡山商工会議所、公益社団法人おかやま観光コンベンション協会、

岡山カルチャーゾーン連絡協議会、大学コンソーシアム岡山、株式会社山陽新聞社、RSK山陽放送株式会社、

岡山放送株式会社、テレビせとうち株式会社、公益社団法人岡山県バス協会、一般社団法人岡山県タクシー協会、

西日本旅客鉄道株式会社、株式会社中国銀行、公益財団法人石川文化振興財団



■事業構成

① 現代アート展

本国際現代美術展のテーマを体現する現代アート作品の制作及び展示を行う。
アーティストの選考は、総合ディレクター、アーティスティックディレクターが行います。

② ラーニングプログラム

岡山芸術交流の参加作家の作品や展覧会展示作品を素材とし、
展覧会テーマや 展示作品をより深く掘り下げて理解してもらうためのプログラムを実施します。

③ パブリックプログラム

岡山芸術交流が地域に開かれ、浸透し、持続・発展していくため、
市民・県民 が展覧会により親しんでもらうための各種プログラムを実施。展覧会への
来場のきっかけづくりとしての役割も担うプログラムとして、本展会場以外の場においても広く開催します。

④ 学校連携／地域連携

[学校連携]

コンセプトの1つ「人を育む」の観点に立ち、岡山の未来を担う児童及び生徒が芸術作品に触れる機会を増加させるとともに、岡山芸術交流2019が想像力や感受性をより豊かにする一助となることを目的とし、県内の教育機関に対する綿密な事前周知や「出前講座」を実施いたしました。

小・中学校、高校の校外学習・部活動等の鑑賞連携

本展への県内来場予定校…62校、約4,700名（前回：42校、約3,200名）
市内小・中学校の出前授業実施校…13校

[地域連携]

市民・県民、産業界、教育機関、文化団体など様々な主体の参画を促すため、
地域へ向けた説明機会を設けることで一層の浸透を図ります。

地元公民館への出前講座やアートツアー等延べ17回開催



岡山芸術交流実行委員会 会長

岡山市長

大森 雅夫

岡山市の中心市街地は、岡山城や岡山後楽園の一角を中心とする旧城下町とJR岡山駅周辺の2つのエリアを核として長年発展を続けてきました。とりわけ旧城下町エリアは、戦国末期の岡山開府以来400年以上の歴史を誇る岡山の顔とも言うべきエリアであり、その地で培われてきた文化が今日の岡山らしさや岡山の魅力のルーツとなっています。

私たちはこの岡山の歴史・文化と芸術の持つ力に着目し、両者を融合させ、新たな価値を創造させるべく、3年前、旧城下町エリアに最先端のコンセプチュアルアートを集結した、国際現代美術展「岡山芸術交流 2016」を開催しました。その結果、国内外から延べ23万4千人もの来場者があり、現代アートには、国境・地域・性別・世代の違いを超えて人と人、まちと人をつなぐ力があることを強く感じました。

そして、このたび2回目となる「岡山芸術交流2019」を開催します。今回アーティストックディレクターを務めるピエール・ユイグ氏の示したタイトルは、「IF THE SNAKE もし蛇が」であり、旧城下町エリアに、9か国18組のアーティストによる約40点の最先端の現代アート作品を展示します。多くの方に非日常的な現代アートと歴史・文化の魅力が融合した岡山のまち歩きを楽しみながら、新たな視点や気づきを発見していただきたいと考えております。文化・芸術の力が岡山のまちに新たな魅力や価値を創り出していくと確信しています。

「岡山芸術交流2019」に多くの皆様のご賛同とご協力を賜りますよう、お願い申し上げますとともに、国内外からの多数のご来場を心からお待ちいたしております。



総合プロデューサー

石川康晴

公益財団法人 石川文化振興財団理事長。1970年岡山県生まれ。23歳でアパレル製造・販売会社を創業。代表取締役社長を務めるストライプインターナショナルは、ファッションだけでなく最新テクノロジーを駆使したプラットフォーム事業・ライフスタイル事業にも注力し、アジアを中心に世界各国への進出を強化している。2011年からコンセプチュアルアートを中心に現代アートのコレクションを開始。2014年には公益財団法人石川文化振興財団を設立。2017年よりTATE International Council Member。2014年の岡山市の、「歴史まちづくり回遊社会実験事業 Imagineering OKAYAMA ART PROJECT」製作委員会の代表、2015年より岡山芸術交流総合プロデューサーとしてプロジェクトを主導している。

総合ディレクター

那須 太郎

TARO NASU代表。ギャラリスト 1966年岡山市生まれ。早稲田大学卒業後、天満屋美術部勤務を経て、1998年、現代美術画廊 TARONASUを東京都江東区佐賀町にて開廊。2019年、港区六本木に移転、現在にいたる。現代美術作家の展覧会を通じて美術の普及に務める。国内外の美術館含む公共機関との協働多数。2014年、「歴史まちづくり回遊社会実験事業 Imagineering OKAYAMA ART PROJECT」製作委員長、2015年からは岡山芸術交流の総合ディレクターとして作品の選定、展示等を手掛け、中心的な役割を果たしている。

パブリックプログラムディレクター

木ノ下智恵子

アートプロデューサー。大阪大学共創機構准教授。神戸芸術工科大学大学院修了。専門は現代芸術、文化政策、事業企画制作等。神戸アートビレッジセンター美術プロデューサー等を経て現職。大阪大学では企業とNPOによるコミュニティスペース「アートエリアB1」の運営や「クリエイティブアイランド」をテーマにした事業などに従事。展覧会やアートプロジェクトの他に、震災復興やまちづくり、医学関連の学会に関する文化事業、近代産業遺産を活用した企画を手がける。行政や企業等の芸術文化関連の委員・審査委員を務め、芸術文化条例の策定や文化政策に寄与している。岡山芸術交流では2016年よりパブリックプログラムディレクターを担当。



デザイン:

ピーター・サヴィル Peter Saville

1955年、イギリス・マンチェスター生まれ。イギリスを代表するグラフィックデザイナーで、1970年代から80年代にかけて手がけた、マンチェスターのインディペンデント・レコード・レーベル「ファクトリー・レコーズ」のジャケットのデザイン(特にジョイ・ディヴィジョン、ニュー・オーダーなど)で広く知られる。その活動は音楽関連に止まらず、アドビシステムズ、CNN、ジバンシィなどイギリス国内外の有名企業のデザインも手がける。アーティストとしても活動しており、岡山芸術交流2016では、アナ・ブレスマン(Anna Blessmann: 1969年ドイツ・ベルリン生まれ)とのアーティストユニットとして、旧後楽館天神校舎会場にて「触れる作品」(Touching Work)を展示、子どもたちを中心に人気の作品となった。

デザインコンセプト:

オーケー(いいね)、岡山。オーケー(いいね)、岡山芸術交流。

今や世界の共通言語であるオーケー。いいね、を意味する、その2文字の形と音を「オカヤマ」の英語表記と音に重ねたのが今回のロゴデザイン。オーケーという記号が表す肯定の姿勢を、岡山と岡山芸術交流に反映させ、ロゴデザインを目にした人に岡山への興味、岡山芸術交流への賛同を促す。さらにこのデザインは、デザイナーであるピーター・サヴィルの個性、クールでシンプルなサヴィルらしさをあますところなく発揮しているのも注目点。サヴィル自身の世界的な知名度とあいまって、国際社会においても普遍的かつ認知度の高いロゴデザインとなることを期待している。

IF THE SNAKE もし蛇が



展覧会「もし蛇が」は、独立した一つの生命体である。それは異なる種類の知的生命形態や化学的、生物学的、アルゴリズム的過程の異種混交に添うように航行する。この特定の設定の存在がもつ一つひとつの特徴は、それぞれの共存状況の条件ゆえに先天的にダイナミックな性質を備えており、偶発的な連続性のモードとして果てしなく成長していく。

この幼いが複雑なシステムは絶えず自身の適応力を変更しながら、いかなる潜在的な目撃者に対しても無関心を貫く。そして自然発生的な秩序や自己生成、意識を有する素材、意味の置き換えに迅速に反応する。この展覧会はその存在についての数多く存在する仮説の一つとして立ちあらわれるにすぎない。

「もし蛇が」は、多様な相からなる肖像画ではない。機械のなかの幽霊でもなく、人間の属性や価値観にのみ認識されるアニミズムでもない。それは自らを表現しながらもなお表現することを避ける。奇異なもの、人工的な他者性の帰化、ある奇妙な主体の形態形成。

「既知」に束縛された合意形成に依拠する現実から旅立つためには、フィクションのもつ不確かな要素が必要だ。不可能と考えられていた世界に手を伸ばすために、それらがどのような世界になりうるか、遊び心をもって想像し、具体的に現実のものとするために。無目的なこのトポロジーは多孔性のフィクションの一種の氾濫であり、ある不確実性の状態へと入り込むクロスフェード、可能性の不安定な形式化の一個の連続体なのだ。

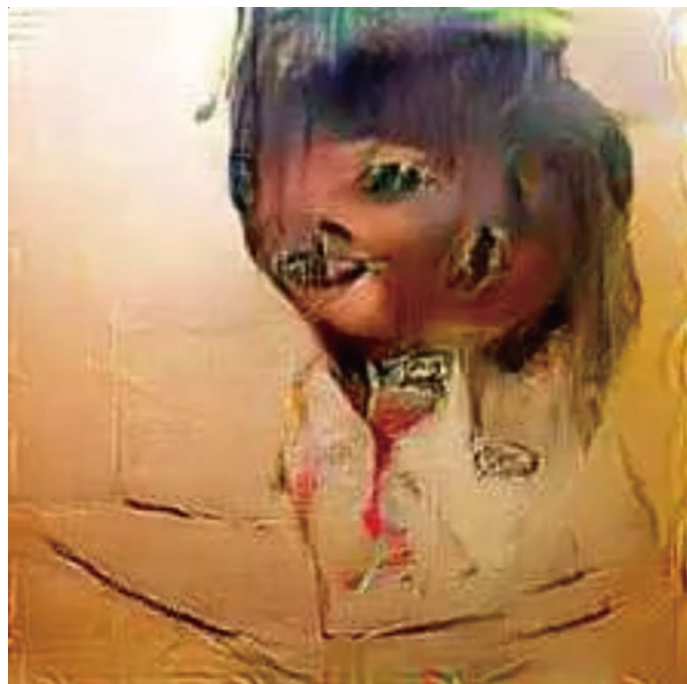
ピエール・ユイグ Pierre Huyghe



1962年、フランス、パリ生まれ。現在はニューヨークを拠点に制作活動。
ユイグの作品は広範囲にわたる生存形態や、無生物、科学技術によって特徴づけられた複雑なシステムとしてしばしばその姿をあらわす。ユイグの構築した有機的組織体は、生物学的要素と科学技術的要素、そして架空の要素を結合させるだけではなく、(仮想現実)没入型の、常に変化し続ける環境を作り出す。その環境のなかで、ヒトや動物、非存在もまた学習し、進化し、成長する。2001年に参加した第49回ヴェネツィア・ビエンナーレにて審査員賞受賞、2002年ヒューゴ・ボス賞受賞。2017年ナッシャー彫刻賞を受賞。近年の主な展覧会は、2018年「UUmwelt」サーペンタイン・ギャラリー(ロンドン)、2017年ミュンスター彫刻プロジェクト(ドイツ)における「After A Life Ahead」、2015年のメトロポリタン美術館(ニューヨーク)のルーフガーデン・コミッション、2014年「A Season Dedicated to Pierre Huyghe」アーティスト・インスティテュート(ニューヨーク)。2013年から2014年には、ポンピドゥ・センター(パリ)、ルートヴィヒ美術館(ケルン)、LACMA(ロサンゼルス)を巡回した。近年参加した主なグループ展として、2016年「Tino Sehgal」パレ・ド・トーキョー(パリ)、2015年「Saltwater: A Theory of Thought Forms」、第14回イスタンブール・ビエンナーレ、2012年ドクメンタ13(カッセル)など多数。



Pierre Huyghe
Photo: Ola Rindal



Pierre Huyghe UUmwelt, 2018-ongoing
Collection of LUMA Foundation
Courtesy of the artist, Hauser and Wirth and Serpentine Galleries
© Kamitani Lab / Kyoto

タレク・アトウィ Tarek Atoui



1980年、レバノン生まれ。現在はパリを拠点に制作活動。

アトウィは1998年にフランスに渡り、サウンドアートと電子音響音楽を学んだ。2008年、新しい電子楽器の研究開発の拠点であるアムステルダムのSTEIMスタジオのアーティスティック・ディレクターに就任。2019年、第58回ヴェネツィア・ビエンナーレとヨークシャー・スカulptチャー・インターナショナルに参加。その他にも、2009年と2013年のシャルジャ・ビエンナーレ（アラブ首長国連邦）、2010年ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート（ニューヨーク）、2010年メディアシティ・ビエンナーレ（ソウル）、2010年Haus Der Kunst（ミュンヘン）、2011年Performa 11（ニューヨーク）、2012年documenta 13（カッセル、ドイツ）、2012年サーペンタイン・ギャラリー（ロンドン）、2014年第8回ベルリン・ビエンナーレ、2017年Kunstenfestivaldesarts（ブリュッセル）、2017年Mirrored Gardens Space（広州）、2018年NTUシンガポール現代アートセンター（シンガポール）、2018年Garage（モスクワ）などの国際的な展覧会に参加している。2016年には、ロンドンのテート・モダンで自身の主要プロジェクトの1つである「The Reverse Collection」を発表し、またノルウェーで開催された現代美術のためのトリエンナーレ Bergen Assembly 2016の共同アーティスティック・ディレクターに任命された。

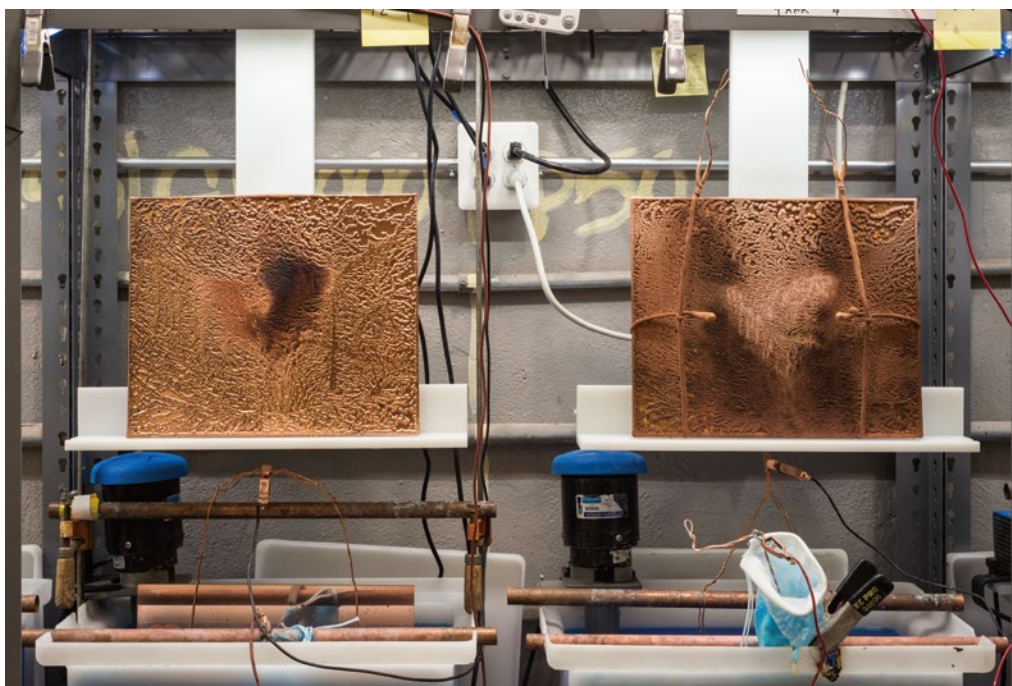


Tarek Atoui
The Reverse Collection, 2014 at Tate Modern during opening week
© Tarek Atoui
Photo : Tate Photography

マシュー・バーニー Matthew Barney



1967年、サンフランシスコ生まれ。現在はニューヨークを拠点に制作活動。
1989年にイエール大学卒業。学生時代にアスリートだった経験から、アートの中で身体の限界とその超越を探究。最初期より、映像や彫刻、写真やドローイング、パフォーマンスや身体表現とメディアを横断する作品群を発表し続けている。代表作として3幕からなる映像オペラ『RIVER OF FUNDAMENT』(2014)、全5作からなる『クレマスター』サイクル(1994-2002)、現在も進行中の「拘束のドローイング」シリーズなど。グッゲンハイム美術館(ニューヨーク)、サンフランシスコ近代美術館(サンフランシスコ)、金沢21世紀美術館、ハウス・デア・クンスト(ミュンヘン)など世界各地の美術館にて個展開催。最新作「Redoubt」は2016年から3年間かけたプロジェクトで、彫刻やインスタレーション、フィルム作品などで構成。その個展がイエール大学美術館(2019、ニューヘイブン)で開催され、UCCA(2019、北京)、ヘイワード・ギャラリー(2020、ロンドン)へと巡回。フィルム作品『REDOUBT』は東京でも上映予定。



Matthew Barney
Bayhorse: State four and Bayhorse: State five in electroplating room, 2018
Courtesy of the artist and Gladstone Gallery, New York and Brussels
Photo: Paul Kennedy

エティエンヌ・シャンボー Etienne Chambaud



1980年フランス、ミュルーズ生まれ。現在はパリ、ミラノにて制作活動中。

シャンボーのマルチメディア芸術の実践は「分断のエコロジー」、すなわち連続と不連続との間に存在し得る空白の研究と定義できる。彼の作品や展覧会は欠落、破断、穴ぼこ、破片、残骸、生理的廃棄物、論理的矛盾、そして不完全性に満ちている。ローザンヌ美術大学(ECAL、2003年)およびニースの国立高等美術学校ヴィラ・アルソン(2005年)を卒業。2005年、リヨン国立高等美術大学の大学院課程に進み、2018年からPSL研究大学の博士課程(SACRe)および国立高等美術大学(エコール・デ・ボザール)の博士号候補者。近年の主な個展に、2018年「Negative Knots」Kunsthalle(ミュルーズ)、2016年「INCOMPLT」、2013年「The Naked Parrot」、2010年「On Hospitality」(いずれもメキシコシティのLABORで開催)、2012年「Undercuts」Forde(ジュネーブ)、2009年「Color Suite」パレ・ド・トーキョー(パリ)等がある。2010年は1年の間に、「Contre-Histoire de la Séparation」CIAP(ヴァシヴィエール)、「Objets Rédimés」Bugada&Cargnel(パリ)、「The Decapitated Museum」Sies +Höke(デュッセルドルフ)、「The Sirens' Stage」David Roberts Art Foundation(ロンドン)、「Le Stade des Sirènes」Kadist Art Foundation(パリ)、「Lo stato delle sirène」Nomas Foundation(ローマ)を開催。グループ展も、ホワイトチャペル・ギャラリー(ロンドン)、ポンピドゥ・センター(パリ)、カルティエ財団(パリ)、MAMCO(ジュネーブ)、CCA Wattis(サンフランシスコ)、Art Unlimited, Art Basel(バーゼル)、MOCA(デトロイト)、マリアン・グッドマン・ギャラリー(ニューヨーク)、ケイシー・カプラン・ギャラリー(ニューヨーク)、Museum Ostwall im Dortmunder(ドルトムント)、ヴィラ・アルソン(ニース)、リヨン・ビエンナーレ等、多数参加している。



Etienne Chambaud
Production image of Calculus, 2019
Courtesy of the artist

ポール・チャン Paul Chan



1973年、香港生まれ。現在はニューヨークを拠点に制作活動。
チャンは美術家、文筆家、出版者として活動。アニメーションやドキュメンタリービデオ、立体、インスタレーションからフォントのデザインまで、多様な形態の作品を発表してきた。2014年には、2年に一度、現代美術に目覚ましい貢献をした作家に贈られる、ヒューゴ・ボス賞を受賞。その作品は世界各国で展示されており、近年の主な個展として2018年ゲッティ美術館（ロサンゼルス）、キクデラス美術館（アテネ）、2017年ペンシルベニア美術アカデミー（ペンシルベニア）、2011年-2012年「Before The Law」ルートヴィヒ美術館（ケルン）、2007年-2008年「ザ・セブン・ライツ」（サーペンタイン・ギャラリー、ロンドン）／（ニュー・ミュージアム、ニューヨーク）などがある。2012年ドクメンタ（カッセル）、2009年第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ、2008年横浜トリエンナーレ、2007年イスタンブール・ビエンナーレ、2006年ホイットニー・ビエンナーレ（ホイットニー美術館、ニューヨーク）など、各国の国際展に参加。またチャンの評論はArtForum、Frieze、Flash Art、October、Tate、Parkettを始め多数の雑誌に掲載されている。2010年には出版社「Badlands Unlimited」をニューヨークにて設立。



Paul Chan
Happiness (Finally) After 35,000 Years of Civilization (after Henry Darger and Charles Fourier), 2000-2003
Courtesy of the artist and Greene Naftali

イアン・チェン Ian Cheng



1984年、ロサンゼルス生まれ。現在はニューヨークを拠点に制作活動。

モーションキャプチャーなど最先端のアニメ技術を使い、人工的に作られた事物が異種混合的に絡み合う映像作品を制作している。近年の個展として、2018年サーペンタイン・ギャラリー（ロンドン）、2017年MoMA PS1（ニューヨーク）、2015年サンドレット・レ・レバウデンゴ財団現代美術館（トリノ）、デュッセルドルフ美術館（デュッセルドルフ）、2014年ミラノトリエンナーレ（ミラノ）などがある。主なグループ展として2017年横浜トリエンナーレ、2016年リバプール・ビエンナーレ、2015年パリ市立近代美術館（パリ）、オルブライト=ノックス美術館（アメリカ合衆国）、2014年台北ビエンナーレ（台北）、2013年リヨン・ビエンナーレ（リヨン）、MoMA PS1、2012年スカルプチャーセンター（ニューヨーク）など多数。



Ian Cheng
BOB (Bag of Beliefs), 2018-2019
Courtesy of the artist, Pilar Corrias, Gladstone Gallery

メリッサ・ダビン & アーロン・ダヴィッドソン Melissa Dubbin & Aaron S. Davidson



共にアメリカ生まれのメリッサ・ダビン(1976年-)、アーロン・ダヴィッドソン(1971年-)の2人組。
現在はニューヨークを拠点に制作活動。

ダビン&ダヴィッドソンは 1998 年よりアーティスト・ユニットとして活動中。写真、ビデオ、サウンド、パフォーマンス、彫刻、書籍といったメディウムを用いての作品群を発表する彼らは、伝達と受信／干渉と移転のプロセスについて言及しながら、しばしば音、光、空気、時間といった無形または短命な物質のありさまを実体化しようと試みてきた。2016年には世界的に有名なピノー・コレクションが運営するアーティスト・イン・レジデンスに参加。近年の主な個展に、2017年「Bitter Sweet Symphony」untilthen(パリ)、「Poetique dessciences」Fresnoy(トゥールコワン、フランス)、2016年「Nobody Shoots a Broken Horn in Early Spring」Campoli Prest(パリ)、2013年「Audio Visual Arts(AVA)」(ニューヨーク)など。またBeirut Art Center(ベイルート)、スカulptチャー・センター(ニューヨーク)、Overgaden(コペンハーゲン)、ニュー・ミュージアム(ニューヨーク)、光州ビエンナーレ(韓国)など各国の美術館やギャラリー、芸術祭での展示機会多数。



Melissa Dubbin & Aaron S. Davidson
Core (1), 2017
Courtesy of the artists
Photo : M.Dubbin & A. S. Davidson

ジョン・ジェラード John Gerrard



1974年、アイルランド生まれ。現在はダブリン、ウィーンを拠点に制作活動。

ジェラードが制作するのは、過去100年の人間活動の拡大に伴う力の構造の変化やエネルギーのネットワーク化を探るシミュレーションだ。彼の作品は地理的に隔離された場所、たとえば農地が広がるアメリカのグレートプレーンズ、モハーベ砂漠の太陽光発電所、ゴビ砂漠の遠隔地、ジブチの軍事演習場などをテーマとすることが多い。リアルタイムCGで制作したこれらのシミュレーション作品には始まりも終わりもなく、プログラムに従って、ソフトウェアがライブ情報を提供し続け、作品のなかでも設置された場所と同じように1年が過ぎていき、繰り返す。ドキュメンタリーがベースになって架空の現実が見出され、科学実験、産業、持続可能性、時間との関係性などが検討される。

最近の主な作品に、屋外のLEDスクリーンを使った特異なインスタレーションがあり、2017年サマセット・ハウス(ロンドン)、2018年LACMA(ロサンゼルス)、そして2019年 パームスプリングス(Desert Xの一部として)で発表している。近年、2018年「Long March Project: Building Code Violations III -Special Economic Zone」Long March Space(北京)、2018年「Manifesta12 - The Planetary Garden. Cultivating Coexistence」(パレルモ)、2017年「Electricity」Wellcome Collection(ロンドン)、2016年「John Gerrard: Power, Play」Ullens Centre for Contemporary Art(北京)、2015年「Exercise」Kunsthalle Darmstadt (ダルムシュタット)、2014年「Solar Reverse」Lincoln Center in Association with the Public Art Fund (ニューヨーク)などに出展。2020年はGalway International Arts Festival(ゴールウェー、アイルランド)と光州ビエンナーレ(韓国)に出展予定。



John Gerrard
X. laevis (Spacelab) , 2017
Courtesy of the artist, Thomas Dane Gallery, and Simon Preston Gallery, New York

ファビアン・ジロー&ラファエル・シボーニ Fabien Giraud & Raphaël Siboni



共にフランス生まれのファビアン・ジロー(1980年-)とラファエル・シボーニ(1981年-)が2007年よりパリを拠点に制作活動。

彼らの共同作業は、映画の歴史、哲学、そして技術進化の考察に基づいている。2014年以降、人間自身を抹殺する装置としての技術の歴史を追及する中で、映画、パフォーマンス、そして彫刻の3つで構成される長期プロジェクトに取り組んでいる。2018年、映画8本で構成されるプロジェクトの第1部「The Unmanned」を完成。コンピューティングの歴史を遡って語るという発想のもとに歴史を逆戻りし、未来を予測するために考案された技術が私たちの過去を変革する道具へと変えられる。第2部「The Everted Capital(資本の反転)」の制作も最近始まり、価値は将来どうなるかという推測に基づいた映像が展開される。ジローとシボーニは近年、2018年MONA(オーストラリア)、2018年Casino-Luxembourgなどで個展を開催。2019年Kunsthalle Wien(ウィーン)、2015年Museo Pallazo Riso(パレルモ)、2015年リヨン・ビエンナーレ、2016年リバプール・ビエンナーレ、2017年パレ・ド・トーキョー(パリ)、2017年VAC Foundation(ヴェネツィア)などのグループ展にも多数参加している。

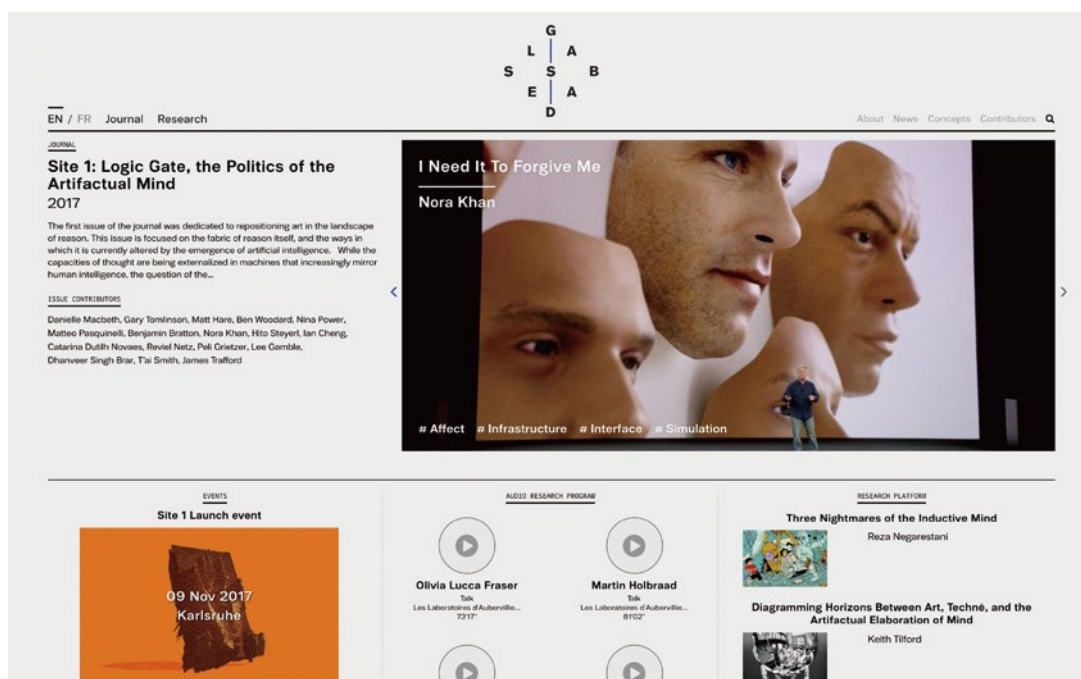


Fabien Giraud - Raphaël Siboni
The Everted Capital (1894-7231) Season 2 - Episode 1, 24h, 2018
© Fabien Giraud & Raphaël Siboni

グラスビード Glass Bead



芸術、科学、哲学といった複数の学術的、実践的、政治的な交差を考えるリサーチ・プラットフォーム。アーティスト、歴史家、理論家により構成されている。パリとロンドンを拠点に活動。オンライン上で記事を公開している他、本の出版、レクチャー、ワークショップなどを行う。MoMA-PS1、ZKM - Center for Art and Media(カールスルーエ)、e-Flux(ニューヨーク)などでも活動。メンバーにはファビアン・ジローが含まれている。



エリザベス・エナフ Elizabeth Hénaff



1981年、アメリカ オースティン生まれ。現在はニューヨークを拠点に制作活動。
エナフは計算生物学者兼アーティスト。生物と環境の間の「浸透性のある境界」を研究対象としており、査読付きジャーナルへの科学論文の投稿、スペキュラティブデザイン(介入)、そして美術展参加まで、幅広い成果を上げている。植物はどう重力に反応するか、ゲノム構造はストレスに応じてどう変化するかなどの解明に貢献し、最近では、地球にあまねく存在する目に見えない微生物に注目している。研究上の疑問に答えるために必要なソフトウェア、ウェアウェア、ハードウェアなどのツールを常に作り続ける。共同作品を2016年のヴェネツィア・ビエンナーレ、ストアフロント・フォー・アート&アーキテクチャー(ニューヨーク)、サイエンスギャラリー(デトロイト)などに展示。現在、ニューヨーク大学タンドン工科大学院助教授で、バイオデザインの授業を担当。



Elizabeth Hénaff
DRIFT, 2019
Courtesy of the artist
Photo : Elizabeth Hénaff

エヴァ・ロエスト Eva L' Hoest



1991年、ベルギー、リエージュ生まれ。現在はブリュッセルを拠点に制作活動。
ロエストは主に、記憶と、その不可思議な存在、余韻のように残る存在の探究に取り組んでいる。
彼女が追及するのは、ぼんやりと、あいまいに浮かんでくることの多い追想。それが情動や情緒となる
認識の周縁(ふち)に着目する。「イマージュを解釈し、歪曲し、選択し、あるいは時に飽和させ、改変する
、一つの記憶の操作者」のように、最初に取り組むのは光の偶然だ。ロエストは作品1つ1つに、現代の
技術を駆使し、世界を捉えるプロテーゼ(人工装具)としての性質と芸術的媒体としての可能性の双方
を明らかにしていく。近年、参加した主な展覧会は、「Suspended time, Extended space」Casino
Luxembourg(ルクセンブルグ)、「Fluo Noir」BIP2018(リエージュ)、「WHSS」Melange(ケルン)、
「Memoires」ADGY Culture Development Co. Ltd(北京)、「Trouble Water」Szczecin
Museum(シュチェチン、ポーランド)、「Snake Driver」Galerie Albert Baronian(ブリュッセル)、
「Now Belgium Now」LLS358(アントワープ)、「Chimera: Marcel Berlangier, Djos Janssens
and Eva L' Hoest」Meetfactory(プラハ)、「Marres currents #3: Sighseeing」(マーストリヒト、
オランダ)。2018年、彼女が制作したいくつかの映画は、Rencontres Internationales Paris-
Berlin、Visite Film Festival、Videographie 21の上演リストに掲載され、Carreaux du Temple
(パリ)、Haus der Kulturen der Welt(ベルリン)、Muhka(アントワープ)で実際に上演された。



Eva L'Hoest
Under Automata, 2017
Courtesy of the artist

フェルナンド・オルテガ Fernando Ortega



1971年メキシコシティ生まれ。現在はメキシコシティを拠点に制作活動。

オルテガは、日常生活の中で生じる詩的な瞬間や幸運な瞬間を題材にして、さまざまな形態の作品を多く生み出している。彼にとって、創作とはこの世界で遭遇する謎に対して抱く自らの疑問や好奇心を突き詰めることだ。インスタレーション、パフォーマンス、サウンドを通して、彼は空間を変え、アクションを演出し、そしてクモの巣から建設用クレーンに至る多様な素材と取り組む。そのプロジェクトでは、通常はギャラリーや美術館のスペースを想定して構想される展示が、外の日常の領域へと移され、平凡で見過ごされがちな些細な事柄が展示の主役となる。作品の多くは、可視性と不可視性の優美なバランスを保ち、素材の相対的な大きさと耐久性を吟味し、そして私たち人間と時間がどのように関係し、その関係が世界における私たちの経験にどのように影響するかを追及している。オルテガの主な個展として、2016年「Nota Rosa」ルフィーノ・タマヨ美術館（メキシコシティ）、2012年「Fernando Ortega」パレ・ド・トーキョー（パリ）、2008年「Levitacion asistida」Museo de Arte Carillo Gil（メキシコシティ）、2008年「Winter Falls」Bonner Kunstverein und Artothek（ボン）、2004年「Project Room」、ARCO 04（マドリード）、1998年「Resumen」Fundacion Ludwig de Cuba（ハバナ）などがある。また彼の作品は、2017年 第14回リヨン・ビエンナーレ、2015年第11回SP-Arte - サンパウロ・ビエンナーレ、2013年13回イスタンブール・ビエンナーレ、2012年（第30回）、2006年（第27回）、2002年（第25回）のサンパウロ・ビエンナーレ、2010年Biennial of the Americas（デンバー）、2008年Biennale Cuvee 08（リンツ、オーストリア）、2003年第50回ヴェネツィア・ビエンナーレなど、数々のビエンナーレにも出展されている。



Fernando Ortega
Untitled, 2003
Courtesy of the artist and kurimanzutto, mexico city

シーン・ラスペット

Sean Raspet

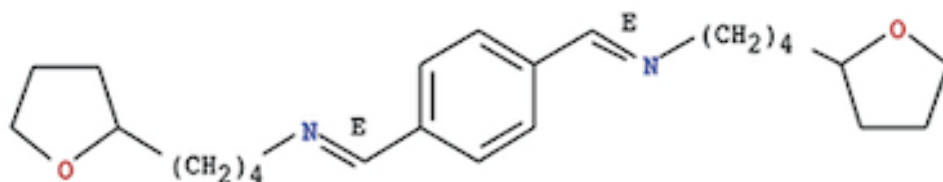


1981年、ワシントンD.C.生まれ。現在はロサンゼルスを拠点に制作活動。

ラスペットの作品は、しばしば人工風味の液体化学製剤や香りの分子で構成される。とりわけ近年は食物、栄養素、人間の代謝、幹細胞を介した人間の細胞の発達等も作品に取り入れてきた。

ラスペット自身が味と香りに関する化学者であり、また藻類を原材料とする食品会社“Nonfood”の設立者でもある。彼の実践はアートに特化した経済構造から距離を置くことを優先している。

大量生産品や登録商標の構造といった現在優勢を占める生産方法を作品に利用しながら、経済全体の循環へとつなげている。The Artist's Institute (ニューヨーク)、シカゴ現代美術館、デトロイト現代美術館、デ・ヤング美術館(サンフランシスコ)、木木美術館(北京)、Societe(ベルリン)、The Kitchen (ニューヨーク)、など各国で展覧会を開催。2016年ベルリン・ビエンナーレをはじめとした国際展への参加も多数。

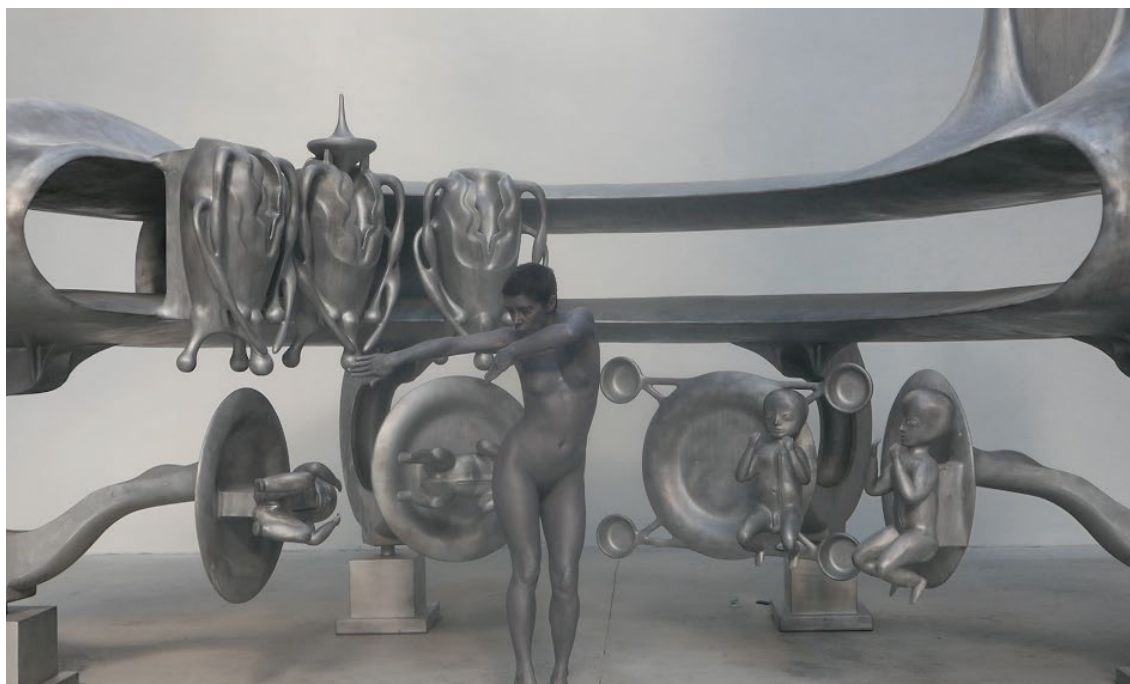


リリー・レイノー＝ドゥヴァール

Lili Reynaud-Dewar



1975年、フランス生まれ。ローマ、グルノーブルを拠点に制作活動。
ドゥヴァールはダンス、文筆、映像、彫刻、ビデオインスタレーション、パフォーマンスなど様々なジャンルで活動。ジュネーブ造形芸術大学教授であるドゥヴァールは、作家単独で、または友人や家族、生徒とともに制作を行っている。2009年、ドロシー・デュピュイ、ヴァレリー・シャルトランと共同で、芸術とエンターテインメントに関するフェミニスト出版社「Petunia」を設立。2015年、文筆作品を集めた「My Epidemic, texts on my work and the work of other artists」をパラグアイ・プレスより発表。同年には自身のスタジオにて、パリ、ジュネーブ、ウィーン等から友人作家を集め一夜限りの展示を行う「Maladie d'Amou」と呼ばれる社会的・感情的な実験プロジェクトを始動。
また、ドゥヴァールは作家への報酬増と美術業界における差別廃止を求める団体「Wages For Wages Against」の一員である。



Lili Reynaud-Dewar
TEETH GUMS MACHINES FUTURE SOCIETY
(ONE BODY, TWO SOULS, BRUNO GIRONCOLI), 2017
Courtesy of the Artist and Clearing

パメラ・ローゼンクランツ Pamela Rosenkranz



1979年、スイス生まれ。現在はチューリッヒを拠点に制作活動。

映像、彫刻、インスタレーションなどを扱い、人間の実存と虚構、グローバル化と消費社会の問題を扱うことで知られている。近年の個展として、2017年プラダ財団(ミラノ)、2015年ヴェネツィア・ビエンナーレ、2010年ジュネーヴ近現代美術館、ブラウンシュヴァイク美術館(ブラウンシュヴァイク)などがある。近年参加した主なグループ展として、2017年ルイジアナ美術館(コペンハーゲン)、マイン美術館(ドイツ)、2014年カルマインターナショナル(スイス)、2013年ヴァルト(ベルリン)、2008年のベルリン・ビエンナーレ、マニフェスタ 7(イタリア)など多数。



Pamela Rosenkranz
Healer (Sand), 2019 at Sharjah Biennale 14
Photo: Studio Rosenkranz

ティノ・セーガル
Tino Sehgal



1976年、ロンドン生まれ。現在はベルリンを拠点に制作活動。
他人に指示を与え、従来のアートパフォーマンスの領域を踏み越えたパフォーマンス作品を発表している。またそれらのパフォーマンスを一切記録に残さないことで知られている。2013年にヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞を受賞。近年の個展として、2016年パレ・ド・トーキョー(パリ)、2015年アムステルダム市立美術館、キアスマ美術館(ヘルシンキ)、2012年テート・モダン(ロンドン)、2010年グッゲンハイム美術館(ニューヨーク)。近年参加した主なグループ展として、2014年ヴェネツィア・ビエンナーレ／建築、2012年上海ビエンナーレ、ドクメンタ13(カッセル)、2010年光州ビエンナーレ(韓国)、2007年リヨン・ビエンナーレなど多数。

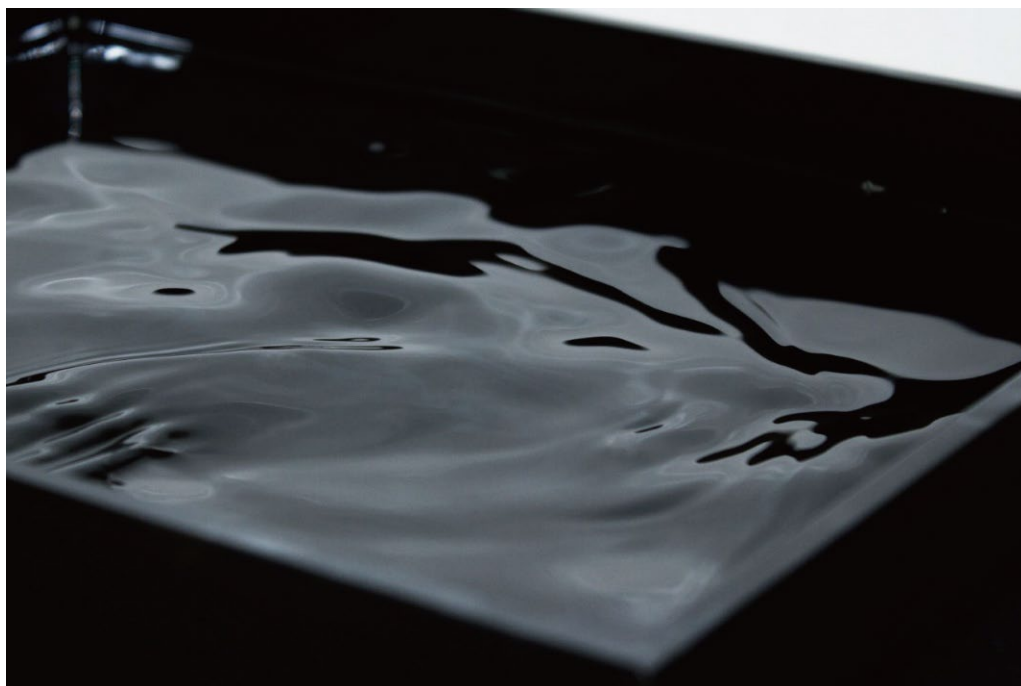
NO PHOTO

ミカ・タジマ

Mika Tajima



1975年ロサンゼルス生まれ。現在はニューヨークを拠点に制作活動。
現代生活を取り巻くテクノロジーに焦点をあて、ペインティング、立体、映像、インスタレーションなどのメディアを通じて、人間と人工物の関係や、人間が自ら作り出した環境や社会について考察する作品を発表してきた。2017年度には New York Artadia Award を受賞。近年の主な個展に 2018年「MIKA TAJIMA: ÆTHER」Borusan Contemporary(イスタンブール)、2017年「After Life」Wadsworth Atheneum Museum of Art(ハートフォード)、2016年「Meridian(Gold)」スカulptチャー・センター(ニューヨーク)、「Emotion Commune」Protocinema(イスタンブール)、「EMBODY」11R(ニューヨーク)、2014年「Total Body Conditioning」Art in General(ニューヨーク)など。近年参加した主なグループ展として、2017年「COLORI」Castello di Rivoli and GAM(トリノ)、「All Watched Over by Machines of Loving Grace」パレ・ド・トーキョー(パリ)、2013年「六本木クロッシング 2013: アウト・オブ・ダウト」(森美術館)など。



Mika Tajima
New Humans, 2019 (detail)
©Mika Tajima Courtesy of TARO NASU and Okayama Art Summit Executive committee
Collection of Ishikawa Foundation Okayama

アクセス



東京から

- 飛行機 [羽田空港] ANA・JAL10便/日(約1時間20分)
※岡山空港～JR岡山駅 リムジンバス(約30分)
- 新幹線 [JR東京駅] のぞみ(約3時間20分)
- バス [東京] 夜行バス(約10時間)

名古屋から

- 新幹線 [JR名古屋駅] のぞみ(約1時間36分)
- バス [名古屋] 高速バス(約5時間20分)

京都から

- 新幹線 [JR京都駅] のぞみ(約1時間)
- バス [京都] 高速バス(約3時間30分)

広島から

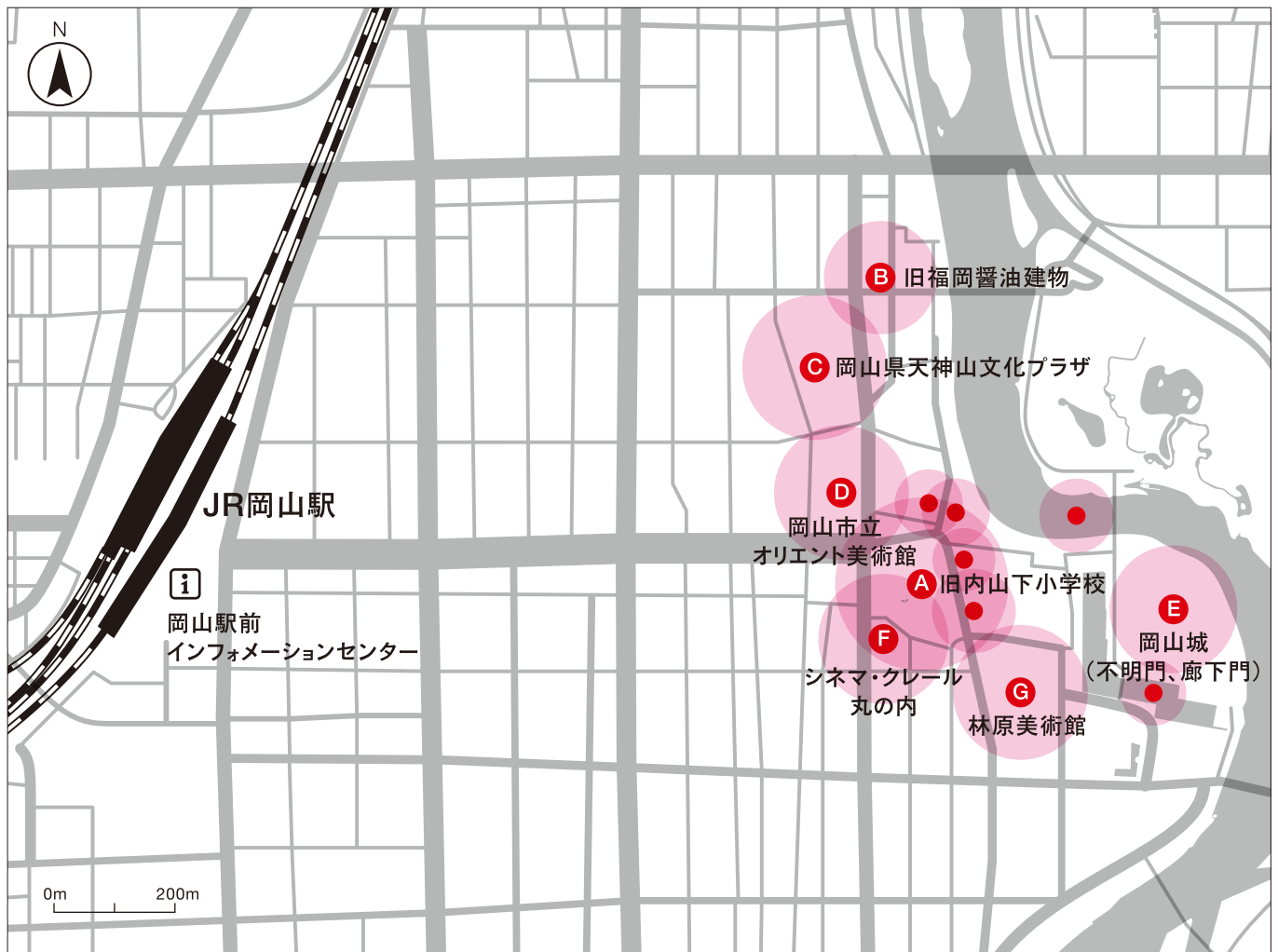
- 新幹線 [JR広島駅] のぞみ(約40分)
- バス [広島] 高速バス(約2時間30分)

福岡から

- 新幹線 [JR博多駅] のぞみ(約1時間43分)
- バス [福岡] 高速バス(約8時間50分)

沖縄から

- 飛行機 [那覇空港] JTA(約1時間10分)
※岡山空港～JR岡山駅 リムジンバス(約30分)



H 岡山市内各所

JR岡山駅から会場までのアクセス

- 徒歩 15 - 20分
- バス・タクシー 5 - 10分
- 路面電車 東山線「城下」電停下車、徒歩4分

会場



A 旧内山下小学校 岡山市北区丸の内1-2-12



旧内山下小学校は、1887年5月、市内小橋町の国清寺内に創立され、1890年8月に岡山城西の丸跡地に移転し、2001年3月の閉校まで同地にあった。現在残る校舎は1933年、1934年に南棟が竣工し、その後1937年に東棟、北棟と渡り廊下が増設されて全館が竣工した。市内最古の鉄筋コンクリート造建築の校舎で、比較的簡素な造形の中に当時流行りの様式の反映も見られ、文化財的観点から見ても貴重な建築物である。



C 岡山県天神山文化プラザ 岡山市北区天神町8-54



図書館を核とした「岡山県総合文化センター」として、1962年6月に開館した。建物の設計は、モダニズム建築の巨匠・前川國男によるもので、屋上庭園、ピロティ、吹き抜けレリーフなど、当時のモダンなデザイン手法が随所に見られる。図書館部門が移転した後、2005年に岡山県民の身近な芸術文化活動と文化情報発信の拠点施設としてリニューアルオープンした。



B 旧福岡醤油建物 岡山市北区弓之町17-35



後楽園の門前町・出石町の中心に位置する古建築で、建築年代が異なる主屋と離れからなる。主屋は明治時代の建築で、かつて醤油製造や市民銀行の窓口として使われ、伝統的な商家の特徴をよくとどめている。住居として使われていた離れは昭和初期の建築で、門・玄関・式台・洋間・客間などを備え、当時主流だった和風建築としては規模が大きく、岡山市中心部にあって戦災を免れた貴重な地区である出石町のシンボリック的存在である。



D 岡山市立オリエント美術館 岡山市北区天神町9-31



学校法人岡山学園(当時の理事長:故安原真二郎氏)より、古代オリエントの考古美術品1,947点を寄贈された事を機に、1979年に開館した国内唯一のオリエント専門の公立美術館。現在の収蔵品は約4,700点(2018年3月現在)。建物は岡田新一氏の設計。2004年に取得したアッシリア・レリーフ「有翼鷲頭精霊像浮彫」は、写実的表現で知られる古代アッシリア芸術の頂点をなすもの。



E 岡山城（不明門、廊下門） 岡山市北区丸の内2-3-1

※不明門のみ

豊臣五大老のひとりで、備前美作57万石の太守・宇喜多秀家の居城として築かれ、かつては5重の堀を擁する巨大な城郭であった。中心となる天守は関ヶ原合戦前に築かれ、古い様式を伝える貴重な天守のひとつであったが、惜しくも戦災で焼失した。築城と同時に整備された城下町は岡山の都市的起源であり、現在でもその痕跡を各所にとどめている。



C 林原美術館 岡山市北区丸の内2-7-15

WC 無線LAN

かつての岡山城二の丸郭の一角に位置し、1964年、故林原一郎氏が蒐集していた古美術品をもとに開館した。国宝を含む国内屈指の刀剣コレクションのほか、岡山藩主池田家の伝来品や、現存を確認された国内唯一の平家物語絵巻の完本を収蔵していることでも知られており、ミシュラン・グリーンガイドで星を得ている。設計は前川國男氏。



F シネマ・クレール 丸の内 岡山市北区丸の内1-5-1

WC 無線LAN

2001年に完成したシネマ・クレール丸の内は、世界の名作フィルムやアニメーション映画を多く提供している岡山唯一のミニシアター。コンクリート打ちっぱなしの独特な外観が、岡山市の歴史文化ゾーンにおいて存在感を際立たせている。

H 岡山市内各所

CCCSCD 岡山市北区石関町6-3 WC

石山公園 岡山市北区石関町6-3 WC WC

旭川/岡山城堀
旭川：月見橋（岡山城北東）
岡山城堀：内下馬橋（林原美術館東）

岡山市民会館
岡山市北区丸の内2-1-1

RSK山陽放送
岡山市北区丸の内2-1-3

i 岡山駅前インフォメーションセンター

岡山市北区駅元町1 岡山駅後楽園口すぐ

無線LAN

その他市内複数箇所に作品を展示



[鑑賞券 券種・価格]



一般

一般
(県民)

学生
(専門学生・大学生) (満65歳以上の方)

シルバー

団体
(8名以上の方)

単館
(1会場のみ鑑賞可)

鑑賞券

| | |
|----------------|----------------|
| 一般 | ¥1,800 |
| 一般[県民] | ¥1,500 |
| 学生[専門学生・大学生] | ¥1,000 |
| シルバー[満65歳以上の方] | ¥1,300 |
| 団体[8名以上の方] | お一人様あたり ¥1,300 |
| 単館 | ¥500 |

[鑑賞券 販売場所]

- A 旧内山下小学校
- D 岡山市立オリエント美術館
- i 岡山駅前インフォメーションセンター
- 岡山芸術交流ウェブサイトオンライン販売
<https://www.e-tix.jp/okayamaartsummit/>

[前売引換券 引換所]

- A 旧内山下小学校
- B 旧福岡醤油建物
- C 岡山県天神山文化プラザ
- D 岡山市立オリエント美術館
- E 岡山城(不明門)
- F シネマ・クレール丸の内
- G 林原美術館

*高校生以下で学生証をお持ちの方、障がい者手帳・療育手帳等をお持ちの方とその付添いの方1人、

その他、実行委員会が必要と認めた方は無料

*前売引換券は、会期中に会場・インフォメーションで鑑賞券で引き換え

*障がい者、介助者1名は無料

*入館当日のみ再入場可能

オフィシャルグッズ



岡山芸術交流2019では、人気イラストレーターの長場雄氏がイラストを担当、アートディレクター川上シュン氏がデザインに落とし込んだ公式グッズを販売します。今回のグッズは、岡山芸術交流2019のアーティストックディレクターであるピエール・ユイグの過去作品に登場する犬、岡山ゆかりの建築家をモチーフとして使用。2016年の前回開催時の参加作家であるピーター・サヴィルによるロゴマークがあしわられたグッズも販売予定です。Tシャツ、トートバッグ、キャップ、タンブラーなど、合計10アイテムを展開します。



パーカー
2種×2色 (white/black)
size S/M/L 各¥4,900(税込)



トートバッグ
2種×2色 (white/black)
size S/M/L 各¥1,900/¥3,900/¥4,900(税込)



マグカップ
2種 ¥1,900(税込)



ステッカー
2種×5色 ¥200(税込)

[オフィシャルグッズ 販売所]

- A 旧内山下小学校
- D 岡山市立オリエント美術館
- H CCCSCD
- i 岡山駅前インフォメーションセンター

関連プロジェクト

A&C



岡山芸術交流2019のプレイベントとして2018年11月より開催。

「A&C」は「Art & City」の略で、岡山市内のカルチャーゾーンを中心としたパブリックスペースに、無料で鑑賞できる現代アート作品を長期間展示する試み。岡山芸術交流2016から継続展示されている2作品に、新たに5作品を加え、まるで街全体が美術館になったかのように現代アートをご覧いただけます。

展示期間： 2018年11月3日(土・祝)～2019年11月24日(日)
展示場所： 岡山市立オリエント美術館(岡山市北区天神町9-31)
岡山神社(岡山市北区石関町2-33)
シネマ・クレール 丸の内(岡山市北区丸の内1-5-1)
林原美術館(岡山市北区丸の内2-7-15)
城下地下広場(岡山市北区表町1 城下地下1)
岡山ランドリービル(岡山市北区表町1-6-15)

料 金： 無料
時 間： 終日(ただし、岡山市立オリエント美術館、
林原美術館は施設の開館日・開館時間に従う)



©Dan Graham, Courtesy of Taka Ishii Gallery,
Photo : S.U.P.C uchida shinichiro

連携プロジェクト

A&A

岡山市内の歴史文化ゾーンおよびその周辺に、世界的に活躍する現代美術アーティストと日本人建築家がタッグを組んでデザインした宿泊施設作っていくプロジェクト。建物は1棟建のプライベートタイプ。芸術への理解促進と芸術を楽しめる滞在型都市岡山への発展を目指す。2019年10月7日(月)よりリアム・ギリック×マウントフジアーキテクツスタジオ、ジョナサン・モンク×長谷川豪の2棟がオープン。詳しくは、A&A公式ウェブサイト <http://a-and-a.org>



A&A Jonathan Hasegawa/ Perspective Image
© Go Hasegawa & Associates

A&A TUBE

岡山芸術交流2016開催時に「A&A」プロジェクト概要を発表するパビリオンとして作られた「A&A TUBE」が今回自由に触れて遊んでいただける“遊具”として再登場。設計はA&Aアドバイザーを務める建築家の青木淳(青木淳建築計画事務所)が担当。

展示期間： 9月27日(金)～11月24日(日)
展示場所： 岡山市北区天神町5-115、116
入 場 料： 無料(会期中のみ)



岡山芸術交流 実行委員会 事務局

〒700-0823 岡山市北区丸の内2-1-1

電話:086-221-0033 | メール: info@okayamaartsummit.jp

取材／広報用画像についてのお問い合わせ

メール: press@okayamaartsummit.jp

<http://www.okayamaartsummit.jp/2019/>

